

道德教育の学問的基盤の解明に関する基礎的研究：  
永田繁雄の道德教育論を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高口, 涼, 藤井, 基貴 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007788">https://doi.org/10.14945/00007788</a>

## 道徳教育の学問的基盤の解明に関する基礎的研究

—永田繁雄の道徳教育論を中心に—

高口 涼\* 藤井基貴\*\*

## The Elucidation of the Academic Foundation of Moral Education

Nagata Shigeo's Moral Education Theory

Ryo KOGUCHI Motoki FUJII

## 要旨

本研究の目的は、道徳教育と道徳の時間についての理論を構築するための入り口を提示することである。そのために、永田繁雄の道徳教育論を検討する。

道徳の教科化をめぐる議論の分析を通じて、道徳教育研究において、理論と実践の交流が少なかったということが明らかとなった。しかし、道徳教育に求められているものは50年以上大きく変わらないままだった。永田繁雄の道徳教育論はこうした現在の道徳教育をめぐる状況に対して、一定の寄与をなすものである。この観点から、学校における教育全体と不可分に結合する道徳教育の「特質」が「多様性」と結びつくと「弾力性」が生じるとする永田の構想を考察する。その結果、永田の主張する「しなやかさ」概念に着目すると、道徳教育は多様な可能性が拓かれることを論証した。

キーワード：永田繁雄 道徳教育 理論 実践 「しなやかさ」

## 1. 課題の設定

## 1-1. 問題意識

道徳教育に関する総合的な学問体系の構築および科学としての道徳教育研究に対する関心が高まっている。本研究の目的は、道徳教育の理論と実践とを結ぶための学問的基盤の解明を目指すことにある。

学校における道徳教育のあり方について、教育哲学者の村井実[1987]は古代ギリシアの哲学をもとに「道徳は教えられるか」という視点から問題を提起した。村井は「道徳」を「道」の教育と「徳」の教育の二つの側面から検討し、「道」と「徳」の相互関係を考察することで、この問いへの解答を試みた。しかしながら、戦後の日本の道徳教育研究において、この問い自体がさらに先鋭化・命題化することはほとんどなかったと言ってよい。このことについて松下[2013]も「道徳教育がふまえるべき『道徳とは何か』という問いは、戦前は教育勅語とともに奥宮に封じ込められてしまっており、戦後七十年近く経ってもまだその扉は開けられていない」と指摘している。

道徳教育をどのように捉えるかについての視点を示すことは、道徳教育の理論と実践を結ぶ研究の第一歩となる。学習指導要領に従えば、「学校における道徳

教育は、教育活動全体を通じて道徳性を育成することを基本」としており、「最終的には、内面に培われた道徳性をもとに、自発的、自律的に道徳的実践のできる児童生徒の育成が求められている」とある。その上で「道徳の時間に道徳的実践を支える確かな道徳的実践力を育てていかなければならない」と記されている。ここで示された「道徳性」、「道徳的実践」、「道徳的実践力」の三点をいかに解釈し、理論および実践への構築を目指すかが本研究の出発点となる。

本稿では、近年の道徳教育界において理論および実践面で多大な貢献を果たしている永田繁雄の道徳教育論を研究対象とし、これからの道徳教育の在り方および「道徳とは何か」という問いへの検討を進めてみたい。

## 1-2. 本稿の位置づけ

道徳教育の研究は、「道徳の時間」の特設以降から理論および実践でそれぞれ取り組まれてきた。理論面では主に教育学系の学会が、実践では全国各地で行われている授業研究会や関連団体がその母体となってきた<sup>2)</sup>。

教育課程における道徳の位置づけ、とりわけ教科として位置づけるか否かについての議論も道徳の時間が特設された頃から行われている。ごく最近の教科化についての議論も、2013年12月26日に文部科学省（以下、文科省）の審議会である道徳の充実に関する

\*静岡大学大学院

\*\*静岡大学教育学部

懇談会から報告された「今後の道德教育の改善・充実方策について」において示された<sup>3</sup>。

道德教育研究について言えば、これまで実践と理論とが相互に交流する機会が限られていたといえる。理論では柳沼良太[2013]が指摘するように「政治的な右派と左派の対立、思想的な保守派と進歩派（革新派）の対立、そして現場的には旧・文部省と日本教職員組合等の対立が色濃く反映されてきた」<sup>4</sup>とする政治やイデオロギー論争と日本以外の道德教育の動向をレビューすることが主たる研究関心となってきた。また、実践においては、「モラルジレンマ」や「構成的グループエンカウンター」などの実践が広められてきたが、実践が方法論に終始して、理論と相互交流がほとんど生じなかったと指摘されている<sup>5</sup>。

このことについて付言すれば、1980年代後半以降には荒木紀幸らがL.コールバーグの「モラルジレンマ」を基にした授業提案および実践したことを皮切りに、林泰成らの「モラルスキルトレーニング」や「ソーシャルスキルトレーニング」、諸富祥彦[2005]が学校の教員らと共同で提案した道德授業等、といった主にカウンセリングや心理学をベースにした研究者からの提案や発信がある。これらの新しい提案は、具体的な判断や行動に着目したものであり、道德教育を子どもたちの内面のみを問題としない授業構成として注目を集めた。諸富[2005]は、1980年代半ばから後半にかけての自身の大学院時代の道德教育研究の経験を振り返り、道德の読み物資料を「何とアナクロニスティック（時代錯誤）なんだろう」<sup>6</sup>と述べ、これまでの読み物資料を批判的に検討した上で、「資料」と「指導方法」に道德の授業の面白さがかかっているのだと指摘した。

林[2009]はモラルジレンマやモラルスキルトレーニング、ソーシャルスキルトレーニングといった方法を、道德的価値を伝達し内面化を図る方法と比較して「進歩主義的アプローチ」と名づけている<sup>7</sup>。こうした新しい道德授業の提案は研究者の中では注目され、また研究の蓄積もなされている。しかしながら、特にモラルジレンマに着目してみると小学校教員の実施は4割程度であるとする藤井・加藤[2010]の調査がある<sup>8</sup>。藤井・加藤の調査にしたがえば、「進歩主義的アプローチ」が理論と実践の往還という形成の過程とみなせるものの、まだまだ発展可能性の余地を残しているということではできらるだろう<sup>9</sup>。

以上のとおり、道德教育の研究においては理論と実践との交流が限定的であったことが一つの課題といえよう。これに対して、本稿で注目する永田繁雄は実践へのコミットメントを継続しながら、みずからの道德教育論を教職員向けの専門誌に発表しつつけた実践的研究者として注目される。その背景には永田自身の経歴が背景となっている。

永田は、もともと小学校の教員として教壇にたち、その後は文部科学省所管の国立教育政策研究所において調査官として道德教育の研究を進めてきた。そうした知見を基にして、現在は大学の教員として、みずからの考えを自身の実践研究成果を踏まえて発信し続けている。永田自身の実践研究は、文部科学省教科調査官（道德担当）として着任する以前のものとして、道德の時間における子どもの学びと道德性の発達、特別活動で行う道德教育がある。また、文部科学省教科調査官（道德担当）に着任以降は、学習指導要領及び同解説編に関わる研究、日本の各地で行われる道德教育研究の指導、共同研究、およびそれらの分析がある。

以下では、議論の下地として、永田の指摘を参照しながら、道德教育に関する近年の動きである教科化について概観する。第2節では、永田繁雄の道德教育論を『道德教育』の連載を手がかりとして、その理論的特徴を分析する。その上で、永田繁雄の道德教育論が実践に根ざした理論であることを指摘し、道德教育の「学」としての基盤の在り方を検討する。

### 1-3. 「特別の教科 道德」をどうとらえるのか

学校教育で急速に道德教育への関心が高まってきたこと背景には、現行学習指導要領で新たに設置することが明文化された「道德指導推進教師」への対応にある。それ以前までは、小・中学校においては「道德主任」等の名称で校務分掌にある場合があったものが学習指導要領の改訂に伴い、名称を「道德指導推進教師」とし、必置のものとなった。道德教育を校長とともにより豊かに、学校全体で展開していこうとする際の架け橋としての役割が期待されている。この「道德指導推進教師」が位置づけられたことについて、永田[2013]は「『道德教育推進教師』が位置づけられたのは、画期的なことだと感じている。道德教育も、その要としての道德の時間も、学校が一体となって学校カリキュラムとして推進していくことの重要性が一層明確になった」<sup>10</sup>と評価する。

道德教育推進教師を学校組織のなかに位置づけたことは、現行学習指導要領への改訂の際に大きく注目された点である。その一方で、道德教育に関する理論と実践とを結ぶ研究の蓄積が手薄であること、加えて教員養成課程における実践的な教育の充実が課題となってきた。実際に大学の教職科目としての講義においては、2単位時間分を確保するだけの大学がほとんどであり、教育課程全体を通じた道德教育を構想、展開するための技量を習得することは困難であるといえる。

先述したとおり、「道德の時間」の枠組みに関する議論は特設以降50年以上にわたり一貫して論じられ続けてきたといって過言ではない。明治図書出版刊行の『道德教育』の前身である『道德の時間』1961年8月号において特集として取り上げられている<sup>11</sup>。その

特集の中で杉谷雅文は次のように指摘している。

子どもの身になって、しんみに、子どもとともに悩み、苦しみ、もがき、勇み、考え、批判し、決断しない教師、こういう教師の指導法、それには、道徳教育に一番大事なものが少なすぎるか、欠けている。こんな指導法は、すらすら運ぶが、あとには何も残らない。水のおもてをすべって行く舟みたいな指導である。子どものいのちが通い、血が脈うっているような指導や内容や方法は、あんなに事もなく、きれいに運ぶものではない(傍点ママ)<sup>12</sup>

「道徳の時間が内容項目に沿うだけの時間となっている」、「道徳の時間が形骸化している」という現在の道徳教育の問題点だけをみれば既に1961年の段階で指摘されていたと見ることができる。評価についても同誌の1962年2月号で既に取り上げられている<sup>13</sup>。この中で三好穂は「道徳の評価が、他の教科の評価ともしっかりと大きくなりつつある点、またちがわなければならぬ点は、個人評価と集団評価が全く同じ重さをもって見られ、行わなければならないという点であろう」(p.7)と指摘している。二つの引用を示したが、これら2つの引用はここ10年の話ではなく、約50年前の話である。

これに関わって、道徳教育研究者の貝塚茂樹[2013]も教育課程審議会の1963年7月11日に出された答申「学校における道徳教育の充実方策について」の内容について、「この答申から50年を経た今日、この指摘は『遠い歴史の一齣』と片付けられるだろうか。残念ながら私にはそうは思えない」<sup>14</sup>、「指摘の内容は、現在の『道徳の時間』の現状に当てはめてもほとんど違和感はないと思える」<sup>15</sup>と述べている。

政治との緊張関係の狭間で戦後道徳教育の論争が続けられる中で、理論と実践の乖離が進むとともに、道徳教育の抜本的な改善が求められ続けた。昨今の「特別の教科 道徳」の提案は教育課程における道徳教育の位置づけを高めることで、内容的な充実を図ろうとするねらいもある<sup>16</sup>。

道徳教育の理論と実践が行き来するにはどうすればよいのか。このことについては、研究者だけが取り組めば良いわけではない。道徳教育の理論だけを追っていくことと、道徳教育の実践との結びつきへの関心を遠ざけてしまう恐れもある。「特別の教科 道徳」の議論に際して考察しなければならぬことは、とりわけ実践者にとっての理論を示すことである。道徳教育の理論史を追うだけでは実践との接合点を見だし辛くなってしまふ。一方、実践史を追うだけではどのような関心のもと議論がなされてきたかはわかるが、理論的に価値付けたり、位置づけたりする力が弱くなる。

そこで、以下、実践に深くかかわりながら理論研究も行い、道徳教育研究の成果を発信している永田繁雄の道徳教育論を中心に取り上げることで道徳教育論の理論構築へ試論することとした。

## 2. 永田繁雄の道徳教育論

### 2-1. 永田繁雄の指摘する道徳教育実践上の課題

道徳の時間に対する教師の意識について次のように指摘している<sup>17</sup>。

- (1) 道徳の時間は、子どもが好きではないと言っている。
- (2) いい資料が少ない。今週は使いたい資料が見つからない。
- (3) 道徳の時間ははじめなどの生徒指導上の問題に力を発揮できないのでは…
- (4) 道徳の時間をやっても子どもは変わらないような気がする。
- (5) そのほか

永田は、多くの道徳の授業を参観し、「そのほとんどの授業で、教師の目線の高さは低く、子どもの意見に耳を傾け、しっかりとうなずく姿を見る。このことが道徳の時間の最大のよさである。道徳の時間は、どの授業よりも教師が底抜けに『やさしく』なることのできる時間だといえる」<sup>18</sup>という感想を残している。その一方で、道徳の時間をどのように構成するかについては授業を行う教師が困難を感じており、その原因は、教師自身の意識の中に存在していると指摘する。

また、行安[2009]も「道徳教育の現状と教師の姿勢」を分析する論考の中で永田の上掲部分を引き、「いずれも道徳授業に対する教師の消極的姿勢を指す」<sup>19</sup>と述べた上で、「西日本のある大学生」の「道徳教育の研究」のアンケート分析をもとに次のように結論づけている。

戦後は、道徳といえば、それは封建道徳として受けとめられ、服従を強いる古い道徳として批判された。それは自由に逆行すると主張された。こうした過去の歴史が、現在の道徳授業に対する教師の消極性の遠因になっていると見ることができる。

しかし、現在の学生のなかには、すでに紹介した感想文(引用者註、大学生の記述アンケートのこと)からわかるように、道徳授業の印象は今もなお心に残っている。このことは道徳授業が現在の学生の心のなかに生きつづいていることを示しており、その成果を上げていると評価することができる。<sup>20</sup>

永田の指摘する道徳教育実践上の課題は、道徳の時間に対する教師の意識と指導に強く向けられている。本節では、さまざまな論者による道徳教育論の比較で

はなく、永田繁雄の道徳教育論そのものに迫っていく。この作業により、林[2009]も指摘しているところの「道徳教育実践学の構築」も視野に入れた、これからの道徳教育論構築への方向性を捉えてみたい。

## 2-2. 永田道徳教育論の全体像

明治図書出版から月刊で刊行されている『道徳教育』の2004年12月号から2014年1月号までの永田による連載分を対象とした。

表1は、永田連載分のテーマと連載回数である。永田の連載スタイルは、期間を貫くテーマがあり、毎号読み切りでタイトルがつき、そのタイトルの事柄を中心に展開するというものである。永田の連載は基本的に「授業づくり」をどのように考えるかについて考察されていることが表からわかる。永田道徳教育論の特徴は、道徳教育をどのように捉えるか、道徳の時間をどのように構成するかということを考える際に、柔軟に考えることを求めている。柔軟に考えるということ永田は「しなやかさ」と表現しており、広く受け入れられやすい表現でかつ、主張の重心が損なわれない表現を用いている。「しなやかさ」については2-3において検討を行った。2-4では、「しなやかさ」とかかわるところもあるが、道徳の時間への誤謬の指摘である。誤謬が解消されることでより「しなやか」に道徳教育が考えられるのではないかという主張が2013年10月号から12月号にかけて論じられている。とくに10月から12月号にかけての提起を軸に検討を行った。2007年11月から2009年3月までの期間は「道徳の時間 50年とこれからの道徳教育」というテーマで連載が17回されている。ここで永田は、道徳の時間が特設されて以後の道徳教育を概観しながら今の道徳の時間の授業づくりをどのように考えたら良いかについて言及している。ただ単に「昔から指摘されている」という指摘に留まらず、明日の授業づくりをどう考えられるかという志向がみられる。この期間の連載については、2-5においてさらに踏み込んだ検討をする。

## 2-3. 「しなやかさ」と授業づくりを楽しむ

2005年2月号の連載において、永田は「しなやかさ」について次のように述べている。

子どもの道徳力＝「心の力」が育つとき、そこには「しなやかさ」がある。自分なりの生き方のプラス志向という軸足があり芯があって、様々な状況に対応できる多様なバネがきいているからである。…〈引用者中略〉…「弾力的に扱うなどの工夫」のある授業が「しなやかさ」のある授業である。そのため、まず①道徳の時間の特徴を十分考慮した指導でなくてはならない。その上に立って、②固定化、

形式化しないような指導、つまり多様な工夫が試みられた指導とすることである。いわば、次のような式で表すことができよう。

「特質」＋「多様性」＝「弾力性」

これとは逆に、「特質」という芯が生かされることなく、単なる「やわらかさ」があるだけの場合は、「何でもありき」の授業となってしまう<sup>21</sup>

永田が「しなやかさ」についての議論は、その子どもも観とも関わる。永田[1993]に次のように指摘している。

…〈引用者前略〉…教師は子ども一人ひとりの自由な発想をできるだけ豊かにさせ、徹底して子どもの活動の助言者、援助者の立場に徹するようにする。気力のない子どもはもともといない。だれもが活動したがっているし、自分をよりよくしたがっている。気力は上からおしなべて植え付けるものではなく、それぞれの子どもの中から引き出すものであることを忘れないようにしたい<sup>22</sup>

永田は、道徳の授業に力が入らなかつたり、腰が引きがちになつたりするのは、道徳の授業に自信がないことからくる教師の感じがちな壁であることを認めつつ、「道徳授業をすることに、必要以上に構えがちになるのだろうか」と道徳の時間の課題を乗り越えて、「しなやかさ」をもつことを提案する<sup>23</sup>。

永田は2013年には連載初期の「しなやかさ」からさらに一歩進んで、弾力性を「『筋肉質』の体質」と表現し、「筋肉質なしなやかさ」を生み出すには授業スタイルを「共感的な追求を中心に棲み分ける『みとめあい』」と「議論や討論での追求で切磋琢磨する『みがきあい』」という二つのキーワードから考えることを提案している。「みとめあい」と「みがきあい」はどちらかが主になる授業もあれば、それらの中間があることもある。「重要なことは、片方だけに頼り、もう一方の授業を見失うことがないようにすることである」と永田は述べている<sup>24</sup>。

道徳の時間はどうすればよいかに答える形で「私はこうして道徳の時間を展開して成功している」や「こうすればできる」といったマニュアルに近い示し方をしたものを道徳の時間で内容項目にあわせて用いるだけの授業から脱却しようという提案であるといえる。永田による道徳の時間の考え方は、子ども個々人の価値の内面的な自覚を促すことという道徳の時間の特徴を踏まえることが前提である。従って、安定的に行うことをだけを求める道徳の時間には否定的である。

道徳の時間は、子どもの行為に直接働きかけて子ど

もをかえようとする練習・実践的なスキルの指導が中心となる時間ではないということを永田はこの「しなやかさ」で論じている。「しなやかな」道徳教育の方向性とは、学習の節目に適切な学習段階がおかれ、かつ道徳の学習過程に筋が通り、貫かれることによって、その特質がさらに活かされるものである。道徳の時間の特質を踏まえながら常に多様な発想を生かして創意工夫をこらすことが「しなやかな」道徳の時間の構成といえる。

「しなやかな」道徳の時間を考えることの楽しさを述べつつ、永田は道徳の時間の特質を踏まえさえすれば、多様な展開ができることを主張している。

#### 2-4. 道徳授業の「禁じ手」

これからの道徳教育を考えるべき方向として永田[2010]は三つのポイントを挙げている<sup>25</sup>。一つ目は、道徳教育に対する教師のマイナスを克服し、多様なニーズに応える指導観を持つこと。二つ目は、道徳の時間の形骸化問題を克服し、形式性と多様性の両面に着眼し弾力的に発想すること。三つ目は、道徳の時間の指導の可能性を開拓し、不易なるものを押さえ時代の要請にも応えることである。

ところで、永田は教員の陥る道徳授業への自己規制、すなわち「禁じ手」はどこが決めるのかについて次のように述べている。

…〈引用者前略〉…「決まりごと＝タブー」は、いったいどこで決まってくるのか。少なくとも、文部科学省が示す「学習指導要領解説・道徳編」などには、制限事項はほとんど見られない。それを決めるのは、多くの場合、有力な研究会であったり、時に指導資料に約束ごとを列記する教育委員会であったりする。指導的立場に立つ人ほど授業の魅力と可能性を広げるべきなのに、この傾向は、道徳授業形骸化への風圧にもなっていると言われても仕方がない<sup>26</sup>

道徳授業の「禁じ手」は授業を構想する授業者の側にあるということである。永田はさらに、子どもの中に「禁じ手」はないことを述べる。

道徳授業の「禁じ手」は、子どもではなく教師の意識の中にだけあるからである。子どもの学ぶエネルギーの向きはむしろ逆である。それは、教師の既定の枠や予測を超えようとする。だから、子どもの学ぶ活力や底力を信じるとき、私たち教師の授業観や授業感覚はおのずと柔らかくなっていく<sup>27</sup>

「しなやかな」道徳の時間を捉えるということは、道徳の時間の特質に忠実になるところから始まるとい

うことである。これまでの実践の蓄積からいわゆる禁止事項(=「禁じ手」)が生まれてきた。「禁じ手」が生じてきた過程について詳細に論ずることは本稿の扱う範囲を超えているので一点のみを述べるにとどめておく。

道徳教育の実践が積み重ねられていくことは大切なことである。しかし、実践が理論と交流を経ないと、実践としての経験だけが一人歩きをしてしまい、当時の実践の中で成功したこと、ないしは課題を多く抱えたものが、これからも同様の結果を見るかのように語られがちになる。永田の指摘を先に挙げたように、「禁じ手」は授業者の側にしかない。「禁じ手」を道徳の時間の特質に照らして再度考察してみることで道徳の時間の授業づくりは「禁じ手」を措いて発想し構築できることが多い。道徳の時間は制約が多いのではない。制約が多いように見えるだけである。ということが見えたとき、道徳の時間を「しなやかに」捉えることができ、「これもできるのではないか」、「これもやってみたい」を出発点として授業を構想することが可能となる。そこから道徳の時間の特質に沿いながらも多様なスタイルが生じ、「しなやかな」道徳教育への構想が芽生え、実践へとうつることとなる。

#### 2-5. 道徳の時間 50年とこれからの道徳教育

表2には「道徳の時間 50年とこれからの道徳教育」というテーマで連載された期間を対象に各回のタイトルを一覧にしたものである。このテーマで連載された期間がちょうど教育基本法改正後の学習指導要領改訂、小学校先行実施前年と重なっていたことから教育基本法や学習指導要領改訂に際して本文中に明文化された「要」について扱った回がみられる。

その中で道徳教育には「変わらないよさがあり、新たな課題もある。これが、『不易と流行』である」<sup>28</sup>と述べている。

こうしてみると、社会の変化に伴う様々な教育課題への対応に道徳教育も応じている。道徳教育の充実は学習指導要領改訂の度に求められ、求められるうちで題材の議論も変遷してきた<sup>29</sup>。不易の目的と流行の視点から教材研究の在り方について、以下にみていくこととしたい。

例えば、1963年の答申と現在の道徳教育の課題を比較したときに、「『学校経営上の問題』と『教育活動全体を通じた指導』の問題、さらには家庭や地域社会との一体的連携の問題」が挙げられ、「問題が少しずつ改善されてきたとしても、現在にまでつながるものも多い」としている。永田は、経験から、「道徳教育とその要としての道徳の時間が、多くの教師や研究者によって充実が図られてきた」ということを認めつつも、「目標の見直し、道徳の時間の『要』としての役割、幼児期から高等学校段階への一貫的な充実、内

容項目の改善、各学校の重点化への配慮、道徳の時間における言語活動等の充実等、それぞれの趣旨を踏まえたこれからの取り組みが期待される<sup>30</sup>として、これからも充実が図られるよう努力を続けていくことを具体的に示している<sup>31</sup>。

教材について、永田は「学習指導要領上に教材の充実が初めてうたわれたのは平成元年の改訂のときである」と指摘し、「常に求められてきた教材の充実」について述べている。さらに永田は教材の延長線上に「心のノート」が作成されたと位置づける<sup>32</sup>。多様な教育課題としては、法教育、金銭教育、食育と道徳教育をどのようにして捉えるかについて「道徳の時間は、教育課題そのものに取り組むために用意された時間ではなく、人格形成の基盤としての道徳性を養うために、普遍的な道徳的価値に向かわせ、その自覚を深めることを主眼としている」<sup>33</sup>と論じている。従って、教材選定は多様に構想できるのは確かであるが、「道徳の時間の特質」という部分が見落とされてはならない。

「しなやかさ」には、先にも引用で示したが「特質」+「多様性」が公式であることをここでも確認しておきたい。

道徳教育の一層の充実の方向は、教育課程上の目標のみならず、多様な教育課題と道徳という「と道徳」の部分にまで視野を広げること、また、これまでの歴史的経緯のなかからも「不易」の部分を見いだすことが「しなやかさ」の筋をよりはっきりさせるためにも見落とされてはならない視点である。

## 2-6. 小括

第2節では、永田の道徳教育論の中でも特に道徳教育及び道徳の時間をどのように捉えることができるかという視点で永田の議論を検討してきた。授業構想に際して注目すると、学習指導要領にはほとんど禁止事項というものは見られないと指摘することによって、永田の議論は授業構想の自由度をひろげようという視点に立っている。自由度が狭められている原因は道徳教育の実践の中で言い伝えられてきただけのものであり、また狭い自由度は構想するもの自身がもっているであることを永田は指摘する。

道徳の時間の「しなやかさ」は、道徳の時間の特質だけでは充足することができず、多様性が必要である。いっぽう、多様性の内実は、新しい教育課題とリンクすることもあるし、多様な指導法を意味する場合もある。

本稿では、とりわけ「しなやかさ」に着目して論を展開してきたが、永田の道徳教育論は道徳をどのように捉えるか、道徳の時間を構想するかというときに次の特徴が連載から伺える。第一に、とりわけ「読み物資料」の分析から新たな視点を提供しているということである<sup>34</sup>。討論や議論を扱う構想に際しても<sup>35</sup>読み

物資料の題材を検討することを通じている。また「安全運転」にとどまらない授業展開をという提案に際しても永田は、資料のもつ特質の検討を通じて「主人公の心情を問う『場面発問』中心の、いわば『安全運転』とも言うべき展開は、そこに後段（引用者註：展開後段のこと）を置き、振り返りにつなげることが多い」授業から「冒険し挑戦する授業」への提案につなげている<sup>36</sup>。

永田の検討から、道徳教育を捉える入り口は「しなやかさ」をキーワードとしながら、これまでさまざまな実践研究が蓄積されてきた、読み物資料をどのような視点から捉え直すかというところからはじめることができると言える。このはじめりは、新たな道徳教育論への橋渡しとなることはもちろんのこと、これまでの読み物資料研究を再吟味することの重要性も提起することとなる。

## 3. 総括・展望

永田繁雄は「道徳の時間」を「しなやかに」考えることを提起した。永田は一貫して「道徳の時間」の特質を踏まえた上で、多様な授業展開、指導法を考えることは可能であると主張してきた。永田はまた、道徳の「禁じ手」は、授業者側に位置する人たちの中においてのみ、しかもそれは伝承のように伝えられてきたにすぎないということも指摘している。

たしかに、道徳教育研究では、理論研究においても、実践研究においても一定の蓄積がなされてきた。理論研究は政治的対立における枠内出の議論か海外のレビューによって、実践研究は授業方法とその記録による蓄積がなされてきた。しかし、それら理論と実践とを結びつける取り組みはまだ少ない。これからの道徳教育にあっては児童生徒の実態に即し、実践研究の知見に基づいた理論の構築が求められている。その際に、永田の問題提起および具体的な方法論が道徳教育を実践するものにとって理解しやすい表現で道徳教育の実践に寄与するものであるということは本論で確認してきた通りである。

これからの道徳教育理論の構築という観点から、永田繁雄の道徳教育論を概観したときに、その議論の有効性は以下に認められよう。まず、これまでの理論史および実践史の知見を継承しつつ、読み物資料の現代的な活用方法を積極的に提言している点である。次に実践者に向けて柔軟な道徳授業への捉え方や考え方の提案がなされている点。最後に、「道徳の授業は難しい」、「道徳を授業で行っても子ども達は変わらないのではないか」、「子ども達は道徳の時間は好きではないと言っている」という道徳教育の授業への悩みを解きほぐし、平易な言葉で具体的な実践例を提供し続けている点である。

新たな道徳教育論としての理論と実践を結びつけた

研究の構想を林[2009]は「道徳教育実践学」名づけている。その「道徳教育実践学」には現代においては永田の道徳教育論を外すことはできない。

その一方で、法教育の研究者として知られる磯山恭子[2007]は、道徳教育の教科化が特集に寄せて二つの視点を提示している。第一は、教科化によって、「新たな倫理規範」への対応と取り扱いがかえって断片化、固定化することへの危惧は否めないという指摘である。第二は、「道徳の多様性の確保」が「教科の枠組みを何によってどのように束ねていくのか」という困難な課題を提示する<sup>37</sup>という指摘である。

今後の課題は、次の二点である。第一は、道徳教育の最新事情と道徳教育の原理的考察の合流点について考察し提案していくことにより、実践への寄与をなすことである。磯山[2007]が指摘しているように「新たな倫理規範」は常に生まれうる。言い換えれば、時代や社会が変容することで道徳も時代や社会の変容とともに変容するということである。最新の情報を得ずにこれまでの歴史的な経緯からのみ教材研究を進めることは、実践の段階において、道徳教育の目的や効果を見誤ることに繋がりかねない。「不易と流行」の視点が授業開発の出発点となる。

第二に、永田の述べる「冒険し挑戦する授業」である。教育学の研究成果に目を向けると、道徳の時間を考える際の教材は多くある。例えば、本論で挙げた法教育や食育のことである。それらの教材を際限なく「冒険」できるわけではない。永田は、「しなやかさ」の公式の中で「特質」を挙げている。「道徳の時間」を多様に構想する際にどのようにこの特質の概念規定をしていくのか。また、その際に、多様性を確保しつつも、道徳の時間の「特質」を生かした「しなやかさ」のある授業構成を担保するにはどのような「特質」の概念規定が可能なのかという問題が今後の研究課題となろう。



表1 雑誌『道徳教育』における永田連載のテーマの変遷（連載期間：2004年12月～2014年1月の9年分）

テーマ期間	テーマ	連載回数
2004. 12. ～ 2005. 11.	子どもの道徳力を育てる道徳授業づくり	12
2005. 12. ～ 2007. 10.	心を育てる教師の道徳授業力	23
2007. 11. ～ 2009. 3.	道徳の時間50年とこれからの道徳教育	17
2009. 4. ～ 2010. 3.	道徳教育の先行研究と実践課題	12
2010. 4. ～ 2012. 3.	これからの道徳授業を構築する	24
2012. 4. ～ 2013. 1.	新・道徳授業論—その可能性をひらくカギ	22

※2012.4～のテーマは2013.1号現在も連載中である。

表2 雑誌『道徳教育』における永田連載のテーマの変遷（連載期間：2004年12月～2014年1月の9年分）

掲載号	タイトル
2007. 11.	改正教育法規が映し出す道徳教育新時代
2007. 12.	子どもの「心の活力」と道徳教育の新たな方向
2008. 1.	道徳教育を学校教育の一貫した基盤として
2008. 2.	子どもの成長発達に応じた道徳授業の改善を図る
2008. 3.	社会の変化に伴う多様な教育課題に対応する
2008. 4.	道徳の時間が「要」となる確かな道徳教育へ
2008. 5.	各教科等での道徳教育と道徳の時間ならではの道徳教育
2008. 6.	魅力があり主張のある全体計画をつくる
2008. 7.	一体的な道徳教育のための推進体制をつくる
2008. 8.	内容項目の改善を生かして一層の充実を図る
2008. 9.	道徳の時間の授業公開で道徳教育を活性化させる
2008. 10.	「重点化」について三つの角度から理解する
2008. 11.	「自己の生き方」についての指導を充実する
2008. 12.	リアリティのある教材で道徳授業の充実を図る
2009. 1.	言語活動の充実で道徳授業の力を高める
2009. 2.	道徳における評価をどのように行うか
2009. 3.	今までの積み上げの上に51年目からの道徳教育を

参考文献

- 浅川和幸[2013]「道徳教育論を考える」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第119号 pp. 27-50
- 磯山恭子[2007]「道徳教育の質的充実に必要な視点」明治図書『学校マネジメント』2007年10月号、p. 7
- 宇佐美寛[1989]『「道徳」授業に何ができるか』明治図書
- 押谷由夫[2011]「特別教科『道徳』の提案」日本教育学会『日本教育学会第70回大会発表要旨集録』p. 278
- 押谷由夫、柳沼良太（編著）『道徳の時代がきた！』教育出版、2013
- 貝塚茂樹[2007]「道徳教育の現状を分析する どの研究団体があるのか」明治図書『学校マネジメント』2007年10月号、pp. 13-15
- 貝塚茂樹[2013]「なぜ道徳の『教科化』が必要なのか」、押谷由夫、柳沼良太（編著）『道徳の時代がきた！』教育出版、2013所収
- 永田繁雄[1993]「子どもの『できそうだ』『やってみよう』をふくらませる」金子書房『児童心理』1993年7月号
- 永田繁雄[2009]「道徳授業の現状分析と今後の動向」日本道徳教育学会『道徳と教育』53号、pp. 150-152
- 永田繁雄[2010]「道徳教育、次の一歩のために—道徳授業の可能性を拓く」日本道徳教育学会『道徳と教育(54)』pp. 264-266
- 永田繁雄 明治図書『道徳教育』連載記事 2004. 12-2014. 1
- 林泰成[2009]『新訂 道徳教育論』放送大学教育振興会
- 松下良平[2011]『道徳教育はホントに道徳的か?』日本図書センター
- [2013]「岐路に立つ道徳教育」教育と医学の会『教育と医学』慶應義塾大学出版会、2013年10月号
- 諸富祥彦[2005]（編著）『道徳教育の新しいアプローチ10』明治図書、p. 13
- 柳沼良太[2013]「『教科化』に賛成派と反対派の主な主張」、押谷由夫、柳沼良太（編著）『道徳の時代がきた！』教育出版、2013所収
- 行安茂[2009]『道徳教育の理論と実践』教育開発研究所

註

<sup>1</sup> 松下[2013]p. 74

- <sup>2</sup> 道徳教育の研究団体についてのまとめは、貝塚[2007]に詳しい。
- <sup>3</sup> 懇談会報告によれば、「道徳教育の要である道徳の時間を、例えば『特別の教科 道徳』（仮称）として新たに教育課程に位置付けることが適当であると考え（p. 15）と記されている。
- <sup>4</sup> 柳沼[2013]p. 27
- <sup>5</sup> 貝塚[2013]を参照。
- <sup>6</sup> 諸富[2005]p.
- <sup>7</sup> 林[2009]特に、pp. 81-102を参照。
- <sup>8</sup> 藤井基貴・加藤弘通[2010]「道徳教育の授業開発に関する基礎的研究(1) —モラルジレンマに関する実態調査から—」『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇』第60号、pp. 237-244
- 藤井・加藤の調査は、A県B市（政令指定都市）の全小学校96校の教員1441名（男性565名、女性876名）を対象に質問紙調査によって期間を2008年11月から12月として行われた。調査結果は、①モラルジレンマ授業は小学校教員の4割程度が実施しており、その内訳は女性より男性のほうに実施経験が高い数値が見られ、年齢は40代後半による使用率が高い。②モラルジレンマ授業は大学院での長期研修を受けた者による使用が高い。ということが藤井・加藤により指摘されている。
- <sup>9</sup> 藤井・加藤の調査については註7を参照のこと。ここで踏まえるのは、「モラルジレンマ授業は大学院での長期研修を受けた者による使用が高い」という箇所である。
- <sup>10</sup> 永田繁雄「道徳教育の改善方策について—大学の教員養成の充実及び教員の指導力向上の観点から—」、「道徳教育の充実に関する懇談会」第5回配布資料（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shoutou/096/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2013/07/24/1338042\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shoutou/096/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2013/07/24/1338042_01.pdf) 2013. 11. 18 確認）より。
- <sup>11</sup> 『道徳の時間』4号、1961年、8月この号の特集のタイトルは「特設の論争点をめぐって」である。
- <sup>12</sup> 杉谷雅文「道徳教育の指導法における問題点」『道徳の時間』1961年8月号 p. 23
- <sup>13</sup> 『道徳の時間』10号、1962年、2月この号の特集のタイトルは「道徳教育の評価をどう考えるか」である。
- <sup>14</sup> 貝塚[2013]p. 32
- <sup>15</sup> 貝塚[2013]p. 32
- <sup>16</sup> 「特別の教科 道徳」については、2013年12月26日の答申である「今後の道徳教育の改善・充実方策について」にもみられる。これ以前には、2011年に日本教育学会第70回大会で押谷由夫[2011]が「特別教科『道徳』の提案」として報告を行っている。押谷によれば、①教科書を無償配布できる点、②評価

(実態把握)ができる点、③教師の指導力向上と道徳教育研究の充実の点から特別教科「道徳」を提案している。従って、「特別の教科 道徳」と言う語で提案がなされているのは2011年頃である。

<sup>17</sup> 永田は講演の場において配布する「拡充資料」・「参考補助資料」で(配布資料に「拡充資料」や「参考補助資料」と永田は名を付している)指摘の部分をより詳細に述べたり、主張の根拠を付したりしている。これは講演当日に配布されるものであり、筆者が参加した講演の資料が複数あるが、それらを平均すると分量は20頁を超える。

本文中で挙げたものは、永田[2009]p.150からの引用である。当日配布資料では、「授業のやり方がわからない。むずかしい」「私は道徳的ではありません」という項目があったということを行安[2009]p.199の引用は示唆している。

<sup>18</sup> これより以下永田繁雄の連載記事からの引用は[年.月号]、頁で示す。永田[2005.5]p.68

<sup>19</sup> 行安[2009]p.199

<sup>20</sup> 行安[2009]p.203

<sup>21</sup> 永田[2005.2]p.69また、引用中の「弾力的に扱うなどの工夫」は、小学校学習指導要領解説道徳編p.73にある指導の展開についての箇所で行安[2009]p.203で用いられている。

<sup>22</sup> 永田[1993]p.92

<sup>23</sup> 永田[2005.1]を参照。

<sup>24</sup> 永田[2013.4]を参照。

<sup>25</sup> 永田[2010] p.264

<sup>26</sup> 永田[2013.11]p.73

<sup>27</sup> 永田[2013.12]p.73

<sup>28</sup> 永田[2009.3]p.71

<sup>29</sup> 教育課程審議会答申「学校における道徳教育の充実方策について」(昭和38年7月)のことである。

<sup>30</sup> 永田[2009.3]p.71

<sup>31</sup> 永田[2009.3]を参照。

<sup>32</sup> 永田[2008.12]を参照。

<sup>33</sup> 永田[2008.3]p.67

<sup>34</sup> 永田の読み物資料に関する研究は、「総合的道徳教育プログラム」(<http://www.u-gakugei.ac.jp/~kokoro/index.html> 2014.1.1確認)に詳しい。

<sup>35</sup> 永田[2011.1]ここでは、黒柳徹子『小さいときから考えてきたこと』を題材にしている。

<sup>36</sup> 永田[2011.7]ここでの資料は「人間愛の金メダル」(文溪堂刊行の道徳資料等で文章を確認することが可能)である。

<sup>37</sup> 磯山[2007]を参照。